幼児集団の動態に関する追求

——幼児の本質をよりよく理解するために——

樋口三紀子

保母としての研究

保育所に勤めて約一年半、私は良き保母になろうと、ただ一生懸命で過ごしてきた。良い保母になるためには——、私は恩師のことばを素直に生かしてみた。それはよりよく幼児を理解することに努力することであった。

私はまだ保母として一年生、保育の実際について、いかに改め、何を取り入れるべきかといったようなすばらしい研究はとても出来そうにない。またそれをしてみようといった大それた気持も毛頭ない。ただ良き保母となるために、よりよく幼児を理解するために私は研究をはじめた。研究といっても幼児がどのように行動し、どのように生活しているかをただ丹念に観察するだけのきわめてささやかなものである。しかしそれをいろいろの立場から整理してみると次々に興味ある幼児の実態が把握でき、私の幼児研究に対する希望は果てしなく広がっていった。また同時に、幼児に対する見方も従来のそれと全く異なってきた。それは私自身驚くほどであった。従来簡単に見逃してきた幼児の幼児たる行動の一つひとつが私にとって重要な意味をもちはじめた。

私が最初に手がけた仕事は保育所内の幼児と動物との関係である(1)。この仕事をしているうちに興味ある事実の数々を得ることができた。すなわち、幼児は自然の動物（主として昆虫）ときわめてよく親しんでおり、私の予想は完全にくつがえされた。また幼児の動物に対する行動には著しい男女差があることが認められた。しかもこの男女差は、個人的な場合よりも集団としてより明瞭に表現

されることがわかった。そうしたことから、私は幼児の集団としての意味あいに興味をもち、その観察に努めた。幼児は独りぼっちで遊ぶことは少なく、大抵集団となって行動している。こういった現象を多角的にとらえた結果を次に述べてみよう。

幼児集団のできかた

幼児の日常生活を観察してみると友人同志が集まって常に集団を形成する傾向がある。この傾向は保育所に往来する時と保育所内とでは全く異なっている。保育所に往来する時の集団は兄弟関係、あるいは近所関係によって結ばれたものであり、男・女といった性の問題とはほとんど無関係である。しかし一度保育所に入り自由な時間を得ると、それらの集団は崩壊して男は男同志、女は女同志の集団を作る(2)。男女の混った集団もあるが、往々にして同性集団を作る移行型として現われる場合が多い。これはいかなる原因にもとづくものかは不明であるが、事実、そうなるのである。とにかく自由な時間における同性集団の形成傾向はかなり強いようである。むろん一斉保育などにおける際の集団(制度上の集団、institutional group(3))は自然集団と比較して相当な制約があるため、幼児のそのような自然的行動はうかがいにくい。

したがって、幼児が一日の間にどのような集団の中で生活するかを大ざっぱにつかんでみると、家庭↓保育所↓家庭といった生活様式から次のことが言える。

すなわち、家族集団から兄弟、近所関係にもとづく集団、さらに遊び仲間による同性集団、そして再び兄弟、近所関係による集団から家族集団へと移行することになる。

保育所内において男児と女児が別々の集団を形成する事実は、保育上きわめて重要な問題である。

男児集団と女児集団

男児と女児との行動的違いは種々な面で明瞭に現われてくる。男児が虫取り遊びを好むに反して女児は草花を摘むことを好む。男児がギャングごっこを好むに対し、女児はままごと遊びを好む。これら性的相違の現象は、個人としてよりもむしろ集団として明瞭に表現される。男児、女児各集団の遊びを観察するとその事実が明きらかに認められる。

男児集団の好む遊びは虫取り・すもう・ベースボール・ハンドカーといったような順位性があり、女児集団はぶらんこ・ジャングル・ままごとといったような順位性がある。しかし実際は女児もベースボールを好む。ただ広場と道具を男児が占有しているためにできないまでのこと、といったような考えも成り立つ。しかし男児を除外

して遊び場を女児だけに提供してみたが、女児はやはりベースボールはしなかった。これは遊びの好みに明瞭な性的相違のあることを示すものである。

そういった遊びに対する好みの違いから、男児、女児各集団は自分たちの好む遊びをじゅうぶんに堪能できるか、というとかならずしもそうではない。男児集団はしばしば女児集団の遊びを妨害している。そのような観察例を一つ挙げてみよう。初春の頃、数人の男児が砂場ですもうをとっており、数人の女児がジャングルで遊んでいた。その時ある先生が「もうすもうはやめなさい、また昨日のようにけがをするよ」と注意した。すると男児はしぶしぶすもうをやめて、なにして遊ぼうかといった表情で女児の遊んでいるジャングルに近づき、女児に混って遊び始めた。このようにしてできあがった混合集団は時間的に長続きせず一～二分にして女児がひとり二人と抜け出して、結果的には男児集団が女児集団を追い出し、男児のみのジャングル集団を形成したことになった。すなわち女児集団の好む遊びも男児集団の働きかけがあれば遊べなくなる。このような幼児集団の動態は女児集団と男児集団の間に生ずる相互関係にもとづくと考えられる。

相互作用

幼児集団の動態は、男女各集団相互間の働きあいによる場合が多い。このような現象を相互作用（coaction）ということが出来る（4）。

前記の例によく似た相互作用例をもう一つ示そう。夏の朝よくみられるが、女児集団がぶらんこ遊び、男児集団が虫取り。男児は網を振りまわして一生懸命であるが、やがて獲物を取り逃がしたと見えて虫取り遊びはあきらめ、楽しげに遊ぶ女児のぶらんこ集団に近づく。しばらくみとれているが、やがて女児のぶらんこを一つ二つと占有し、女児のぶらんこ集団の崩壊と同時に男児のぶらんこ集団が形成される。この場合の幼児集団の動態はきわめて自然的で、暴力的なものではない。いつのまにか集団が変わっていったというような興味ある現象である。

一面この現象は、女児がぶらんこ遊びに飽きた時にちょうど男児が近づいた、そのために生じたもので、遊具をゆずった現象であるという見方もある。しかし女児のぶらんこ放棄が飽きに原因しない明瞭な例もある。その一つを示してみよう。剣劇ごっこをしていた男児集団が、先生の注意で崩壊したことがあった。その時彼らは木ぎれを納めてしばらくぶらぶらしていたが、やがてシーソーで遊んでいる女児集団に近づき二人～三人と女児に混って遊びはじめた。すなわちシーソー集団は女児集団から混合集団へ変わっていったわけである。しかしそれに従って女児はひとり離れ二人離れてゆき、間もなくシーソーは男児集団によって占められた。しかし追い出さ

れた女児はまだシーソー遊びをあきらめていなかった。というのは彼女たちはそばにしゃがんで土いじりをしながらも、男児のシーソー遊びを眺めていた。やがて五分後に男児が他の遊びに走り去り、だれもいなくなったシーソーに再び遊んだのは、そばにいた先刻の女児たちであった。

これは明きらかに飽きによって女児集団が崩壊したのではなく、男児集団の働きかけによるものである。このような例はきわめて多い。

以上のような、いくつかの観察例によって示されたように、幼児集団の動態は男女各集団の間の相互作用にもとづく場合のきわめて多いことが明きらかになった。

蚊の仲間でコガタアカイエカは牛馬の血を吸い、アカイエカは人の血を吸うが、コガタアカイエカを駆除すると人の血専門とみられていたアカイエカが牛馬の方にまで侵入して吸血する。しかし再びコガタアカイエカが現われると、アカイエカは逃げてしまう。川でアマゴは下流にイワナは上流に住んでいるが、イワナのいない川ではアマゴは上流にでも住む。こういった動物間の相互作用は数多く見られるものである(5)。

樹液に集まる昆虫も優位の蜂が集まっていると劣位の蝶は近づかない。これは優劣の順位関係によって生ずる動態であるが、かならずしもこの順位のみで動態を説明することはできない。すなわち樹液の出る樹孔の状態が蝶に都合が良く蜂に都合の悪い場合もある。このような異質的特徴が動態に影響している場合も多い。

このことは幼児集団の動態においてもみられる現象である。ままごと遊びの場合男児よりも女児が優位のように見える。これは単なる力関係でなく男女の質的違いの面が現われた結果とみられる。

幼児間の相互作用と設備

幼児集団の間にみられた動態は園内の幼児数と、その設備された遊具、玩具(6)の数および遊びの空間と密接な関係がある。

めずらしい玩具を与えると、まず男児が占有する。女児はそれを早く使いたくて訴えるがほとんどの場合男児が飽くのを待たねばならない。しかしそれがじゅうぶんに与えられたならそのような現象は比較的少なくなる。一般に、相互作用の現象は設備がじゅうぶんな所より不じゅうぶんな所において著しい。特定人数に対する遊具玩具の数が多いほど、また遊びの空間が広いほど幼児間の相互作用は生じにくい。

しかしこの相互作用は設備によっても、全く除かれるということはない。すなわち、幼児は日常好んで使われる遊具が誰も使わないであいているのに、人の遊んでいる他の遊具に集まり遊ぶ傾向がある。独りで遊びたがらない、とにかく集まろうとするのである。し

たがって、設備を増すことが相互作用を緩和することにはなるが除くことにはならない。これらの諸点は保育所における設備の理想的ありかたに重要な意味をもつものではなかろうか。

おわりに

以上述べたように、幼児は友人同志によって集団を形成する傾向が強く、とくに同性による集団をつくる場合が多い。これらの男女各集団は遊びに対する好みの性的相違から、一時的には安定しているが、ややもすれば男児集団の女児集団への働きかけによって、集団の著しい動きが生ずる。

このような幼児集団の動態は、男児と女児の本質的な性差、ならびに彼らが集団となった場合にかもしだす力によるものであろう。

このような幼児の実態をどのように保育に取り入れてゆくかは、なみなみならぬ大問題である。男女共同の生活の場である保育所において、男女差をどのように扱うか。集団の動態は自然のままでよいか。設備はどの程度が理想か。などなどの難問は私にとって大きな悩みとなった。

また一般に、生物群衆の動きは環境条件によって、影響されていることが多い（7）。保育所内の設備のみならず保母の言動の一つひとつは幼児にとって重要な環境要因である。こういった点を考えるとき、幼児に対する保母の態度の重要さが痛感されるのである。

保育の実際にあたっては、前記のように多くの難問がひかえているが、それらはよりよく幼児の実態を把握することによって初めて解決されるものと思う。むずかしい問題はさておき、私は私なりにただこつこつと幼児の動きを観察してゆきたいと思う。

おわりにこの研究のために貴重なる助言を賜った東北大学加藤陸奥雄教授ならびに御熱心なる御指導を賜った広島女子短期大学新川英明助教授、研究の便宜をはかっていただいたやわらぎ学園長武田ちとせ先生に厚く感謝いたします。

引用文献

（1）樋口三紀子　幼児の教育　第五十七巻　第九号二一頁
（2）樋口三紀子　日本保育学会第十二回大会発表要項三〇～三六頁
（3）D. Cartwright and A. Zander "Group Dynamics"
（4）E. P. Odum "Fundamentals of Ecology"
（5）加藤陸奥雄　動物学基本　二一五～二二二頁
（6）副島　ハマ　保育実習　八三～八五頁
（7）沼田　真　生態学方法論

（やわらぎ学園保育園）

＊　＊　＊